

WELLFLOAT Audio Board TYPE II シリーズ

※写真右が大型サイズの「TYPE4548II」、右下がレギュラーサイズの「TYPE3545II」、右上が小型サイズの「TYPE2130II」



多段振り子構造を採用した
ラインアップを拡大させる

ジークレフ音響が開発する吊り構造のインシュレーター「ウェルフロート」は、もともとボードタイプモデルから始まった。現在レギュラーシリーズと呼ばれるものがそれで、底部から立ち上がった柱にU字バネを取り付け、そこに天面のボードを内側から吊り下げるという方式だ。これに関する解説は今でも同社のホームページに詳しく掲載されているので、興味のある方はぜひご覧いただくとよくわかるはずである。

その後グランドピアノなど楽器用に開発されたフルコンメカがボードにも応用され、Lシリーズや薄型のSシリーズとして親しまれてきた。またスピーカー用として楽器用モデルをアレンジした三角形のウェルデルタも登場し、ラインアップが拡充されて高い人気を獲得するに至ったのである。

しかしウェルフロートが本当に世の中のオーディオファンを驚嘆させたのは、多段振り子構造を採用した円筒形のウェルフロート・バベルが最初と言っている。

岐阜県飛騨市の大型低音重力波望遠鏡KAGRAでも使用されている多段振り子構造をウェルフロート・メカに適用し、4段構成の吊り下げバネ構造として強力な振

上位モデル直系の“多段振り子”を投入

スタンダード・ボードの 第2世代シリーズが誕生

上下方向の振動を水平方向の振動に変換するという独自のカンチレバー＋吊り下げ式振り子構造を発展させ、進化を続けているウェルフロート。最近ではこれを2層多段構造にしたメカを搭載したオーディオボードであるDouble4548や、インシュレーターのBasilisIIが誕生。本誌でも詳細なレポートをお届けしてきた。そしてついにこの2層多段構造のメカが同社のスタンダードクラスのオーディオボードにも搭載、ラインアップが一新されることとなった。ボードの底部に設置されたステンレス製のメカが印象的。世界的カーデザイナー、中村史郎氏のデザインによる逸品に仕上がっている。より幅広い層がウェルフロートの最高技術を体験できる、第2世代のスタンダード・ボードの実力を井上千岳が検証する。

Text by 井上千岳 *Chitake Inoue* Photo by 田代法生

動制御を実現した。その除振率は理論上300Hzで2の16乗、すなわち1京分の1に達する。もはや量子レベルと言っている振動除去性能で、すでに物理的な固体の振動から電子の動作領域にまで踏み込んだ前代未聞のインシュレーターとなったのである。

原点とも言つべき存在の標準ボードについてに搭載

この多段振り子構造はその後のウェルフロートのメインストリームとなり、ラックのウェルフロート・ペガサスII、ボードに応用されたウェルフロート・ダブル、スパイクベースのウェルデルタ・パシリスIIなど様々な製品へと展開されてきた。現在のウェルフロートは、この多段振り子なしには語れない状況になっていると言つても過言ではない。

そしていよいよひとつだけ、最後に残された課題に決着がついた。同社の原点とも言つべきレギュラーシリーズのボードにも、多段振り子を取り入れられたのである。レギュラーボードは1段の振り子メカにMDF製のボードを乗せたシンプルなおディオボードである。サイズも幾つか用意され、アンプやCDプレーヤー、アナログ・プレーヤーなど種々のコンポ

ーネットに対応する。

このパネ構造を2段の振り子構造に置き換えたのが、今回発売されるTYPEIIシリーズである。

天面となるボード自体は、従来どおりブラック仕上げのMDF製である。しかしベースとなる内部構造はいささか複雑で、素材には硬質ステンレスが使用されている。

フレーム型のベース2枚に、各コーナーのサブベースが組み合わされてここにボードが乗る。3層のベース構造である。そして4つのコーナーごとに2基のウェルフロート・メカが装備されて、2層の多段振り子4個でボードを支える仕組みである。

耐荷重は70kg(静荷重)。2段振り子なので、想定周波数を300Hzとすれば理論上2の8乗つまり1億分の1の除振率を持つ計算になる。

サイズは3種類用意され、A4タイプから一般的なCDプレーヤーないしアナログ・プレーヤー、大型アンプまで幅広く活用することが可能である。

従来モデルとは根本的に違つ温かみのある静寂を引き出す

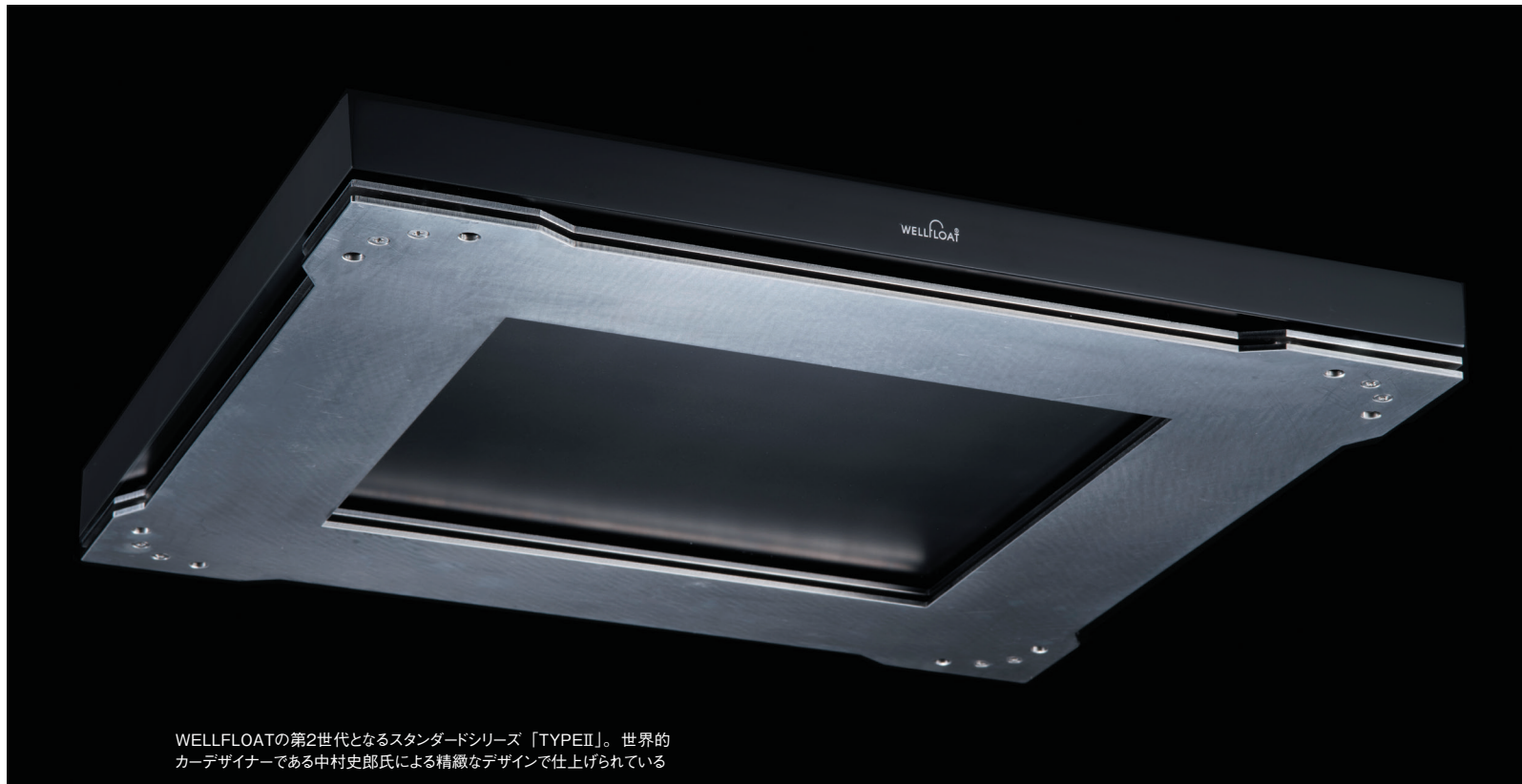
ちょうど従来モデル4548SFがあつたので、これと比較しながら聴いてみることにした。試聴用のSACDプレーヤーを乗せている。

旧モデルはすっかりなじみになつた音で、周囲の静かさがよくわかる。周辺ノイズがずっと消えて、楽器ひとつひとつの音がくっきりと際立つ出方だ。ソースや機材の本来の音が引き出されている。

ところが同じサイズのTYPEIIに交換すると、話は根本から変わってしまう。静かにはなるが、その静かさが違うのだ。

ちょっとウェルフロート・ダブルのことを思い出してみたが、それはキーンと張り詰めたような静寂感で、触れれば切れそうな鋭さもあった。このTYPEIIではそれは違つて、同じくらい静寂にはなるがもつと落ち着いたある種温かみのある静かさを感じる。

出てくる音にもどこか円やかさが乗っている印象で、ピアノの芯の厚さや響きの豊かさなどが心地よく伝わってくる。空間が消えてしまったような静寂とは違つて、



WELLFLOATの第2世代となるスタンダードシリーズ「TYPEII」。世界的カーデザイナーである中村史郎氏による精緻なデザインで仕上げられている

WELLFLOAT「TYPEIIシリーズ」のラインアップ

TYPE 2130II

¥88,000(税込)

- サイズ：297W×210D×45Hmm(A4サイズ)
- 質量：3kg

TYPE 3545II

¥132,000(税込)

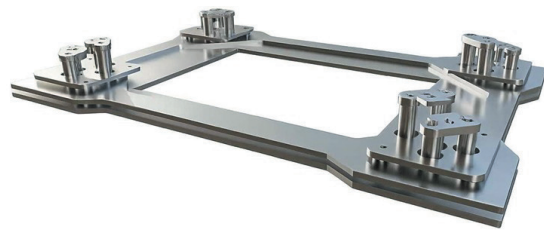
- サイズ：450W×350D×45Hmm(レギュラーサイズ)
- 質量：8kg

TYPE 4548II

¥165,000(税込)

- サイズ：480W×450D×45Hmm(大型サイズ)
- 質量：11kg

ブラック仕上げのMDFボードの下部に設置された多段振り子(2層)構造。4基の2層式ウェルフロートメカを内蔵する。素材には硬質ステンレスを採用し、耐荷重は3サイズともに70kg(静荷重)となる



TYPE 2130 II
297 × 210mm



TYPE 3545 II
450 × 350mm



TYPE 4548 II
480 × 450mm



空間に包まれているという実体感を実感するのである。

同じ2段振り子でありながら別の側面が見えるようなのが面白いので、アートルのパワーアンプとブルーサウンドのストリーマーにもそれぞれ3545IIと2130IIを敷いてみた。

あらためて聴き直してみると、自然で無理のない感触がいつそう強く感じられる。ノイズが消えたというより、歪みが解消されたという印象の方が先に立つ。結局は同じことなのだが、当たりが違ふのだ。切れそうな鋭さではなく、柔らかに包み込む。だから聴いていて静かになったのに気がつかないくらい当たり前の出方になる。バロックなどいい例で、古楽器

のそれぞれの音が明瞭な艶やかさと瑞々しい響きでそれぞれの場所にいる。そこから音が出てくると

いう感覚が、とてもリアルだ。そしてその光景が最初からそこにあつたかのように周囲に溶け込んでいる。生きたリアリズムである。

ピアノは先ほど触れたとおりだが、コーラスも空間と丸ごと一体になつたような透明度が際立つ。そしてオーケストラでは、汚れや濁りが一切消えて新鮮そのものの響きと色彩が展開されている。強靱なダイナミズムは言うまでもないが、その全てが力まずひとりでに鳴っているように自然だ。

大きく進化したレギュラーボードが、これからどんな活躍を見せてくれるのか非常に楽しみである。

2層多段振り子構造を採用し、先行発売されたハイエンドモデルのオーディオボード「WELLFLOAT Double 4548」(¥385,000/税込・写真上)とインシュレーターの「WELLDelta BasilisII」(¥110,000/1個・税込・写真下)
※2026年8月時点での価格

